

第三〇回記念大会へのメッセージ 法政哲学 会の再建にかかわって

Kaku, Akitoshi / 加来, 彰俊

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

49

(発行年 / Year)

2011-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007965>

【第三〇回記念大会へのメッセージ】

法政哲学会の再建にかかわって

加来 彰俊

法政哲学会が第三〇回の記念大会を開催される由、たいへんよろこばしく思います。ここ数年出席できないでいる私は、もう三〇年も経つのかと感慨に耽っていますが、私の事に事務局の方から、この際メッセージでも送ってもらえないだろうかとのご要望がありましたので、僭越ながら、引き受けることにしました。この哲学会の再建にかかわった者の一人として、当時の状況や会の成立経過などについて、思い出すことを少しばかりお話しさせて頂きます。その頃の先生方はほとんどみな亡くなられて、私一人が生き恥をさらしていますので、頼りない生き証人ですけれど、若い会員の皆さん方にも、この会の成立事情について多少知っておいてもらうほうがよかるうかと考えたからです。

まず、最初にお断りしておきますが、「メッセージ」ということになっていきますけれど、その形式にはとらわれない

で、直接皆さん方に語りかけるような口調のものにさせていただきます。また、話の途中で、昔の先生方のことに関する場合にも、私たちの学生時代の習慣では、先生方を親しみをこめて「さん」づけで呼んでいましたので、今回も多くの場合は、「さん」づけで言うことになりましたが、その点もあらかじめお許しを願います。なお、言うまでもありませんが、とかく昔のことを語りたがる老人の一人となっている私のことから、私の思い出話には、記憶違いや誤り、また不正確なところも多々あるだろうと思われませんが、その点もどうかご容赦ください。

—

さて、「法政哲学会の再建」という表題を掲げましたが、

「再建」というからには、それはむろん、以前には「法政哲学会」が存在していたであろうと想定してのことです。「存在していたであろう」というような曖昧な言い方をしましたが、この哲学会発足当時は、「法政哲学会」は存在していませんでしたので、実はあまりよく調べてもみないで、以前にはあったであろうが、今はないから、もう一度再建しよう、そう単純に当時の私は考えていたわけです。

そこで今回は、『法政大学百年史』（昭和五五年刊）を取り出して昔のことを少しばかり調べてみました。すると、「文学部」に関する章のなかに、大正一五年（一九二六年）一月に「哲学会」は創立されたという記述がありました（四四五頁）。（ただし、この会の機関誌『法政哲学』創刊号の終わりに載っている谷川さんの証言では、「哲学会」の創立は二年後の昭和三年となっています）。また、現在も哲学専攻の院生によって刊行されている『哲学年誌』と、同じ表題、同じような体裁の冊子が、「法政大学哲学会」の名前で、昭和六年（一九三一年）に岩波書店から刊行されています（その写真版が『百年史』にも『法政哲学』にも載っていますが、後者には表紙がタテ書きのものもあり、その点はよく分かりません）。この冊子には、三木さんや戸坂さんを初め、昭和四年、法政哲学科卒の池島重信（いけのぶ）さんなども寄稿されています。（なお、現在の『哲学年誌』は、戦

後の昭和四二年（一九六七年）に創刊されたようですが、その表題や体裁は昔のものに做ったのでしよう。そして、昔の『哲学年誌』が発行された翌年、昭和七年には、法政哲学会主催で、西田幾多郎博士を迎えての講演会が開催され、当時の第二講堂は超満員で学外者の入場は断るほどの大盛況であり、世間の反響も大きかったと記されています。西田さんの講演会は翌八年にも開かれ、他の方の公開講演も行われたようです。そして、この「法政哲学会」なる名称は後にも、戦後の昭和二七年（一九五二年）に、石田英一郎さんや先の池島さんらを中心にして刊行された冊子にも見られます。

しかし、これら昔の「哲学会」がどのような規約によって構成されていたのか、また創立以来一貫して継続していたのかどうか、詳細は分かりません。ただ、その辺の事情を確かめるために、ここでちょっと付け加えておきますと、先ほども言いましたように、法政の「哲学会」は大正一五年に創立されたと『百年史』にはありますが、法政大学は、大正一一年の新大学令により、新発足の法学部の中に文学科と哲学科が設置されました。そして翌大正一二年に安倍能成（のぶなり）さんが文学科・哲学科の主任教授として着任され、同じ年にまた和辻哲郎さんも日本思想史や文化史の担当教授として来られるなどして、哲学科の歴史は始まりました。

しかし、大正一二年の哲学科の学生はただ一人（他に聴講生三名）であり、したがって、「哲学会」が創立されたと言われる大正一五年の卒業生は一名、昭和三年でも四名にすぎなかったとありますから、「哲学会」といっても、それはおそらく哲学科の教員を主とした会だったのではなからうかと推測されるわけです。

その点では、昭和六年に『哲学年誌』が刊行された時期の「法政大学哲学会」も、さらには、戦後の昭和二十七年の「哲学会」も、おそらくは同じような組織のものではなかったでしょう（ついでに言い添えますと、大学院に修士課程と博士課程が設置されたのは、それぞれ昭和二十六年と三〇年です）。

こう見てきますと、最初に創立された「哲学会」が後々までそのままずっと継続していたとは考えられません。いやむしろ、それは教員を主とした会、そしてそのときどきの講演会の主催者や刊行物の発行元としての会だったのではなからうかとさえ思われるのです。そしてもし、「哲学会」が教員を主としたものであったとすると、教員人事の大幅な入れ替えは、会の継続を困難なものにしたでしょう。そこで本題からは逸れますけれど、ここで少しばかり法政大学哲学科の教員人事の交替と変遷について、教授であった主な方々の名前をあげながら（皆さんにはもうなじみの

ない人たちでしょうが）、その大筋のところを辿ってみることにします。

二

元総長の谷川徹三さんが、友人の河野与一さんへの弔辞のなかで、「法政哲学科の初代は安倍能成と和辻哲郎、二代目は河野与一と矢崎美盛……三代目は三木清と私（谷川）」であると述べておられますが、前にも言いましたように、大正一二年（一九二三年）に創設されたばかりの哲学科の主任教授となられた、その初代の安倍さんは翌年三月には退職して朝鮮の京城大学へ移られたし、和辻さんもまたその年の末には退職して、翌一四年には京都大学へ行かれました。和辻さん担当の文化史は林達夫さんが継がれたようですが、二代目の大正一四年就任の矢崎さんや河野さんも、昭和二年三月には退職して、それぞれ九州大学と東北大学へ転任されました。そこで三代目として昭和二年四月に三木清さんが京都から来られ、また翌三年には谷川さんも着任されたわけです（私の師の田中美知太郎先生は、三木さんの招きで昭和三年に非常勤の講師となり、そのまま終戦近くまで講師でした）。しかし三木さんは、当時非法団体となっていた共産党に資金提供した嫌疑で検挙拘留

され、起訴となり執行猶予つきの有罪判決を受けたために、昭和五年に退職されたので、その後任として戸坂潤さんが翌六年に着任されて、「唯物論研究会」を組織して活躍されたのですが、その戸坂さんも、三木さんと同様な目にあつて、昭和一〇年には解職されてしまします。

ところで、大学内では、昭和八年末頃から、草創期以来の大学行政の指導者であつた野上豊一郎さん排斥運動が起こり、予科の教授、講師四〇余名が一度に辞表を出すという、いわゆる「法政騒動」があつたり、また、満州事変以来の対中戦争が拡大する中で、本学にも「大陸部」が設置されて大川周明が講師になるとか、「髭の大将」で知られた陸軍大将荒木貞雄が大学の顧問として講演や修身の訓話をするとかいったような、軍部と右翼の圧力が日に日に強まってゆきます。そのような時代状況のなかで、一時期、文学部の学科名も改称されるという事態も生じたのですが、以後、昭和二〇年の終戦に至るまでの期間、哲学科を支えられた教員の主な方々は、草創期以来、ただ一人法政に留まられた谷川さんを中心にして、本学出身の先の池島重信さんや榊田啓三郎先生、そして新任の佐藤信衛教授でした。そして戦後は、昭和二一年に矢内原伊作先生が、つづいて瀬川行有（福田定良）さんが新たに講師として加わり、哲学科の復興が始まります。しかし谷川さんは、二三年か

ら三三年まで一一年間文学部長を勤められたのち、その後は総長にもなられたし、また池島さんも理事なども兼ねて学内行政で忙しかつたりして、さらには、矢内原先生も二年ばかりで法政を去られたり、榊田先生も他の大学へ移られたために、その当時、実質的に哲学科を支えられたのは、佐藤さんと瀬川さんだったようです。

しかし、戦後にもまた政治の大きな嵐が学園に吹き荒れました。その一つは、ご存じの一九六〇年の「安保闘争」であり、二つ目は、六〇年代の終わり頃から七〇年代にかけての「大学紛争」です。だが、特に哲学科に関係する事件といえば、昭和四六年（一九七一年）に、哲学科の研究助手の解職をめぐる起こつた「助手問題」です。これは大へん厄介な問題で、一年有余にわたつて紛争がつづき、そのために文学部全体の授業にも重大な支障が生じたようです。この紛争が起こる前の年（四五年）に、池島さんと瀬川さんは退職されて、矢内原先生が再び法政に戻つて来られ、また分析哲学の斉藤哲郎さんもその前年に着任されていたのですが、助手問題がようやく解決した四七年に、佐藤教授は法政から去られました。それで、その翌年の四八年（一九七三年）に、濱田義文先生と私とが着任し、また東大を定年退官後、講師をされていた山崎正一先生も、翌四九年には専任教授となられました。こうして、哲学科

の教員の顔触れも、また大きく変わる事になったのです。

三

本題から離れて、法政哲学科創立以来の教員人事の変遷について、その大筋を辿ってみたのですが、脇道にそれて、皆さんにはご関心がないような話を長々としましたのも、かつての「哲学会」が教員を主としたものであったとすれば、教員人事の交替によつて、「哲学会」も一貫して持続することは難しかったのではなからうかと推測したからです。では、本題に戻つて、この哲学会の再建の話に移ることにします。

私が法政に着任してまず感じたのは、前の先生方について学んでいた大学院生たちが主を失つた形になり、戸惑いが見られたということです。私も新しい教員の下で引きつづき研究をつづけた院生も何人かいましたが、これを機に、法政から去つて行つた院生も少なくはなかったように思います。それで私は、当時は存在していなかった哲学会を再建して、卒業生たちも定期的に里帰りして旧交を温め、語り合える場を設けたいというのが、私の哲学会再建の動機あるいは目的の一つでした。

二つ目の目的は、法政大学内で広く哲学関係の科目を担

当されている諸先生との融和をはかり、相互の親睦を深めたいということでした。大学内部のセクションリズムはこの大学でも見られることですが、私が赴任してきた当時は、正直に言つて、文学部と第一、第二教養部との間には深い溝がありました。同じ大学に所属し、同じような学問を研究しているのだから、相互に信頼して腹藏なく語り合えるような人間関係が望ましいことは言うまでもありません。しかしこれは、言うは易くして行なうのは難しい、デリケートな問題を含んでおります。そこで私は、事前準備として、学内で広く哲学関係の科目を担当されている諸先生を一夕、神楽坂の小料理屋にお招きして、哲学会再建の趣旨を説明してご理解を願いました。一〇数名参加していただいたように覚えています。その上で私は、主として濱田先生と相談して、会の規約原案の作成に取りかかったのですが、その協議の場には教養部のある先生もお呼びして、その方の強い要望もあり、特に会長職については、他の役員と同様に、二年任期として、文学部から一教、二教へと順送りすることを内規とした記憶があります。初代の会長には、最年長の山崎先生になつてもらいましたが、第二代でしたか第三代でしたかの（記憶が定かではありませんが）会長には、第一教養部で宗教学を担当されていた泰本先生に就任していただいたはず。先生はその後急にお亡く

なりになりましたが、ご遺族からこの会に多額のご寄付をいただいたので、それを基金にして今日の「泰本賞」が設定されたことはご存じのとおりです。

しかしこれは、この会が成立した後の話であり、会を成立させるまでには、もう一つ厄介な問題が残っていました。それは、哲学科の在学生との関係のことです。文学部の他の諸学科では、教員と在学生と卒業生とが一体になって、それぞれに学会がつくられていて、毎年、定期の学会誌も発行されていました。しかし哲学科だけは、在学生はすべて名目的には、全学の学生団体である第一文化連盟所属の「哲学研究会」に加入していることになっており、その研究会が、在学生の入学時の納付金を資金にして活動しておりました。今はどんな状況か知りませんが、当時は、この研究会の指導者たちは学内でも最も急進的な活動家であり、しばしば大学当局と衝突をくり返していました。ですから、哲学科は他学科のように、教員も一緒になった「哲学会」を作ることは困難であり、この会の成立に関しても、彼らは激しく抵抗し反対しました。しかしたびたびの交渉の結果、この会は教員、院生、卒業生などを会員にすること、また会の名称も、学生団体のほうは「法政大学哲学(研究)会」であるのに対して、この会は「法政哲学会」とすることなどで、何とか折り合いをつけました。

四

さて、そういった経過をへて、ようやく「法政哲学会」の発会式を迎える日が来しました。当日の案内状が日記の中に挟んでありましたので、そのコピーがお手許にとどいているかと思いますが、発会式は、昭和五六年(一九八一年)一月二四日(土曜日)午後二時から、当時の私学会館(今の「アルカディア市ヶ谷」)で行なわれました。まず、「規約」の原案を審議承認してもらい、役員を選出した上で、短い記念講演を二つ、旧ソ連領内のカントの生国を短期間訪問して帰国されたばかりの濱田先生からは、「ソ連におけるカント」と題して、次に、本学のご出身で三木清の愛弟子でもあり、戦後の哲学科再建に並々ならぬ苦心を払われた榊田先生からは、「法政哲学科の回顧」と題して、それぞれ感銘深いお話を承りました。そして午後三時半頃からは懇親会に移り、和やかな談笑の中でこの会の再建を喜び合いました。私の日記には当日の参会者、つまり入会者の数は五七名とあります。

あの日から今日まで三〇年、この会も第三〇回の大会を迎えるまでに継続し発展してきたことを振り返ってみて、私も会員の一人として感無量の思いがあります。ただ、最

初の頃は、大会で発表された研究の成果を冊子にして公にする余裕がなかったのですが、やがて間もなく「会報」が毎年発行されるようになり、そして五年前からは、「法政哲学」という表題の、体裁も見事な学会誌が発行されるに至って、何とか他大学並みになったのではなからうかと思っているところです。

『論語』（「為政篇」）の中に、よく知られている「温故（而）知新」（古きを温ねて新しきを知る）という言葉があります。一老人会員としての私は、老人らしい思い出話として、少しばかり法政哲学会の「古きを温ねて」みました。

このような昔話でも、若い会員の皆さん方に、「新しきを知る」ためのよすがとなれば幸いです。記念大会の貴重な時間を割いていただいて恐縮でしたが、以上で、まことに粗末なメッセージとさせていただきます。

会員の皆さんのご健勝とご活躍、そしてこの哲学会のみずみずの発展を祈念して終わりにします。ありがとうございました。

平成二二年六月二六日

（代読 奥田和夫）